

立教大学ジェンダーフォーラム主催 第79回ジェンダーセッション

「エジプトにおける高齢者介護をめぐるジェンダーポリティクス」

日 時： 2019年12月10日(月) 18:30~20:00

講 師： 鳥山純子(立命館大学国際関係学部准教授)

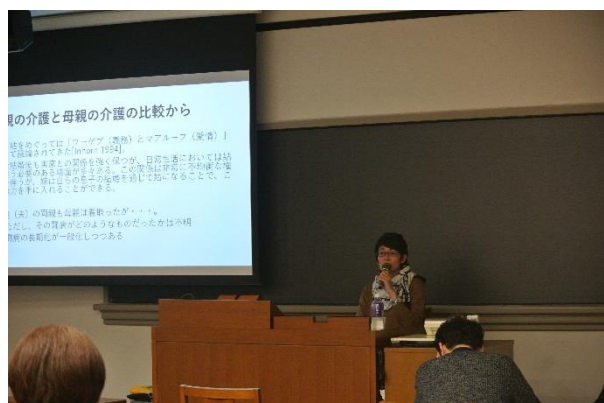
会 場： 池袋キャンパス 本館 1204教室

第79回ジェンダーセッションでは、文化人類学とジェンダーの観点から、エジプトやレバノンをフィールドに中東地域の人々の暮らしをご研究されてきた鳥山純子氏に、エジプトの高齢者介護とジェンダーについてご報告いただきました。

エジプトでは若者人口が多いこともあり、これまで「若者の問題」が注目されてきました。ところが近年、高齢者人口の増加に加え、医療の発展による闘病の長期化が進んだために、ようやく「高齢者問題」が周知され始めたと言います。鳥山氏はエジプト人配偶者の父、母が相次いで要介護となった状態を経験し、介護やジェンダー規範をめぐるエジプト社会の急激な変化を目の当たりにしました。エジプト社会では男女の区分を重視するイスラームの規範にのっとり、被介護者が父親の場合は、実の息子が身体接触を伴う介護を担います。一方、母親の場合は、実の娘ではなく、息子たちの嫁が年長者である姑に従うのが義務とされ、その介護を担います。しかし、嫁規範の変化を背景に誰が母親の介護をするのかという問題が生じたと言います。そこでこうした問題について周囲に聞き取りを行ったところ、みな口を揃えて「離婚した娘」が担えばよいと話したそうです。ここに、鳥山氏はエジプト社会での女性の地位に関する文化相対主義的言説と人々の意識との齟齬を読み取ります。イスラーム社会では女性が抑圧されているという西洋の言説に対し、文化相対主義的言説では、女性は男性や年長者に「従属」することによって保護を受けているのだから、社会的には「公正」だとみなされます。そこではあくまで「従属」は義務であっても、家事や育児は義務ではなく女性たちが自発的に行っていることとされます。しかし上記の介護者を巡る問題を通して見ると、介護という労働を提供することによって女性が保護という「資源へのアクセス」を得ることが人々に当然視されている実態が明らかになります。したがって、「公正」の根拠とされる「保護従属」関係は女性たちの再生産労働を軽視した構造のうえに成り立っていたのであって、その視点に立てば、従来の女性の地位についての語られ方を問い直すことができるのではないかと鳥山氏は論じました。

質疑応答では、日本とエジプトの類似点・相違点や、イスラームの規範、エジプトの福祉レジームについて等、活発な質問が寄せられ有意義なセッションとなりました。参加者の皆様とご報告してくださった鳥山氏に心より感謝申し上げます。

(立教大学ジェンダーフォーラム事務局 横山美和)



セッションの様子